

第32回夏期福音特別集会 第3回集会（伊東）

十字架を荷う

――マルコ伝第8～10章――

1985年7月27日

小池辰雄

汝はキリストなり サタンよ、わが後に退け 己を棄て 霊の貧しき者 己が十字架を負いて
己が生命を救わんと思う者 隠れた福音 復活の予表 幼児の一人を受くる者 富める青年
神有 躍り上がりて

【マルコ8】

27 イエス其の弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々に出でゆき、途^{みち}にて弟子
子たちに問いて言い給う『人々は我を誰と言うか』28 答えて言う『バプテス
マのヨハネ、或人^{ある}はエリヤ、或人は預言者の一人』29 また問い給う『なんじ
らは我を誰と言うか』ペテロ答えて言う『なんじはキリストなり』30 イエス
己がことを誰にも告ぐなと彼らを戒め給う。31 斯^{かく}て人の子の必ず多くの苦難^{くるしみ}
をうけ、長老・祭司長・学者らに棄てられ、かつ殺され、三日の後に甦^{かえ}える
べき事を教えはじめ、32 此の事をあらわに語り給う。ここにペテロ、イエス
を傍^{かたえ}にひきて戒め出^いでたれば、33 イエス振反^{ふりかえ}りて弟子たちを見、ペテロを戒
めて言い給う『サタンよ、わが後に退け、汝は神のことを思わず、反^{かえ}つて人
のことを思う』34 斯^{かく}て群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言いたもう『人もし
我に従い来らんと思わば、己をすて、己が十字架を負いて我に従え。35 己が
生命を救わんと思う者は、これを失い、我が為また福音の為に己が生命をう
しなう者は、之を救わん。36 人、全世界をもうくとも、己が生命を損せば、
何の益あらん。

【マルコ9】

2 六日の後、イエスただペテロ、ヤコブ、ヨハネのみを率^ひきつれ、人を避
けて高き山に登りたもう。斯^{かく}て彼らの前にて其^その状^{さま}かわり、3 其^その衣^きかがや
きて甚^{はなは}だ白くなりぬ、世^よの晒布^{ぬのさらし}者も為し得ぬほど白し。4 エリヤ、モーセと
もに彼らに現れて、イエスと語りいたり。5 ペテロ差出^{さし}でてイエスに言う『ラ
ビ、我らの此^こ処^こに居るは善し。われら三つの廬^{いおり}を造り、一つを汝のため、一
つをモーセのため、一つをエリヤのためにせん』……

7 斯^{かく}て雲おこり、彼らを覆^{おお}う。雲より声出づ『これは我が愛^{いと}しむ子なり、汝



ら之に聴け』⁸弟子たち急ぎ見回すに、イエスと己らとの他には、はや誰も見えざりき。⁹山をくだる時、イエス彼らに、人の子の、死人の中より甦え^{よみが}るまでは、見しことを誰にも語るなと戒め給う。……

¹⁹爰に彼らに言い給う『ああ信なき代なるかな、我いつまで汝らと偕におらん、何時まで汝らを忍ばん。……』

²³イエス言いたもう『為し得ばと言うか、信ずる者には、凡ての事なし得らるるなり』……

³⁵イエス坐して、十二弟子を呼び、之に言いたもう『人もし頭たらんと思わば、凡ての人の後となり、凡ての人の役者となるべし』³⁶斯てイエス幼児をとりて、彼らの中におき、之を抱きて言い給う、³⁷『おおよそ我が名のために斯る幼児の一人を受くる者は、我を受くるなり。我を受くる者は、我を受くるにあらず、我を遣しし者を受くるなり』

【マルコ10】

¹⁷イエス途に出で給いしに、一人はしり来り跪ずきて問う『善き師よ、永遠の生命を嗣ぐためには、我なにを為すべきか』¹⁸イエス言い給う『なにゆえ我を善しと言うか、神ひとりの他に善き者なし。¹⁹誠命は汝が知るところなり「殺す勿れ」「姦淫するなかれ」「盗むなかれ」「偽証を立つるなかれ」「欺き取るなかれ」「汝の父と母とを敬え」²⁰彼いう『師よ、われ幼き時より皆これを守れり』²¹イエス彼に目をとめ、愛しみて言い給う『なんじなお一つを欠く、往きて汝の有てる物を、ことごとく売りて、貧しき者に施せ、さらば財宝を天に得ん。且きたりて我に従え』……』

²⁸ペテロ、イエスに対して『我らは一切をすてて汝に従いたり』と言い出でたれば、²⁹イエス言い給う、『まことに汝らに告ぐ、我がため、福音のために、或は家、或は兄弟、あるいは姉妹、或は父、或は母、或は子、或は田畑をすつる者は、³⁰誰にても今、今の世の時に百倍を受けぬはなし。……』

⁴⁶斯て彼らエリコに到る。イエスその弟子たち及び大なる群衆と共に、エリコを出でたもう時、テマイの子バルテマイという盲目の乞食、路の傍に坐しおりしが、⁴⁷ナザレのイエスなりと聞き、叫び出して言う『ダビデの子イエスよ、我を憫みたまえ』⁴⁸多くの人かれを禁めて黙さしめんとしたれど、増々叫びて『ダビデの子よ、我を憫みたまえ』と言う。⁴⁹イエス立ち止まりて『かれを呼べ』と言ひ給えば、人々盲人を呼びて言う『心安かれ、起て、なんじを呼びたもう』⁵⁰盲人うわぎを脱ぎ捨て、躍り上りて、イエスの許に來りしに、⁵¹イエス答えて言い給う『わが汝に何を為さんことを望むか』盲人いう『わが師よ、見えんことなり』⁵²イエス彼に『ゆけ、汝の信仰なんじを救えり』



と言ひ給えば、直ちに見ることを得、イエスに従いて途^{みち}を往けり。

● 汝はキリストなり

マルコ伝8章27節から。

27 イエス……途^{みち}にて弟子たちに問いて言ひ給う『人々は我を誰と云うか』
「自分を誰だと思ふか」

というイエスの問いに、弟子たちがいろんなことを言っている。

「バプテスマのヨハネだ、エリヤだ、預言者の一人だ」

と。エレミヤとかエリヤを思ったかも知れない。それとはケタが違うんです。次元が違う。キリストというのは絶対次元の人です。比較宗教学の中にのぼってこない。学者なんてものは大したことない。だから、

「偽善なる学者、パリサイ人よ」

とキリストはマタイ伝23章で言っている。キリストの学は絶学の学、学に絶する学です。ペテロは

「汝はキリストなり」

と言った。非常にマルコ伝は簡単です。

「活ける神の子」

とは書いてない。「汝はキリストなり」と。

「貴方はメシヤです」

ということですよ。

「膏^{あぶら}注がれたる者」

特別な神の膏を注がれたる者、聖霊を注がれたるひとのことです。我々も「キリスト」「膏を注がれたる者」なんです、聖霊を受ければ。

「聖霊を受けざればキリスト者に非ず」

とパウロが言ったとおり。ところが、キリスト者の前段階がたくさんいます。私も長いこと前段階だった。ルターも、

「小キリストである」

というようなことを言っている。ドイツ語ではクリスチャンのことを「クリスト」(Christ)と言うから。

この告白は、ペテロはどういう角度から言ったか。別な福音書では、

「それは神が示したものだ」

と書いてある。マタイ伝では、

「お前はペテロだ。お前の上に教会を建てる」

なんて余計な言葉がついてますが、マルコ伝は非常に簡単なんだ。おそらく、本来はマル



コ伝のとおりなんでしょう。

³⁰ イエス己がことを誰にも告ぐなと彼らを戒め給う。

「まだ時が早い」

と。悪鬼が

「汝はキリスト」

と言った時に、

「我を表すな」

と言った。キリストは、自分で仰る時が来るんですが、その時までには余計なことを言うなと。ただ、キリストという事実は、現実には弟子の前にも、いかなる人の前にもはつきり現れた。イエスという人に神様が現象しているわけです。だから、福音書にきて、イエスを見て、神の见えない人は、どんなに神を求めてもダメなんです。どんなに神のことを議論してもダメです。そんなのは問答無用なんです。福音書に来て、

「このイエス・キリストにおいて本当にここに神を見ました」

という人は本当にキリストを見ていることになる。

「イエスは神の子か、神か？」

なんて、そんな下らない議論は要らない。

●サタンよ、わが後に退け

「人の子」という言い方は、旧約のダニエル書からきている言葉で、「メシヤ」ということの暗号です。

³¹ かくて人の子の必ず多くの苦難を受け、長老・祭司長・学者らに棄てられ、

かつ殺され、三日の後に甦えるべき事を教えはじめ

「必ず多くの苦難を受け」

これはイザヤ書53章をキリストは念頭においていらつしやるわけです。

「長老・祭司長・学者らに棄てられ」

そればかりじゃない。ローマの兵隊、民衆にも、キリストを受けとつていた「ワツシヨイ、ワツシヨイ」という民衆にも棄てられた。本来、天涯孤独なかたです。親しい人に棄てられ、誤られた。だから、故里を出てしまった。そういうことを思うと、私は本当に気が楽なんです。誰に認められなくても、どんなに棄てられても、キリストがいよいよ味方になってくださるから。

³² 此の事をあらわに語り給う。ここにペテロ、イエスを傍にひきて戒め出で

たれば、

そうしたらペテロが戒めて言う、

「そんな事は困りますよ」



と。ペテロというのはしよっちゅうこうやって、波のようにいつも出しゃばっているわけなんだ。

33 イエス振反りて弟子たちを見、ペテロを戒めて言い給う『サタンよ、わが後に退け、汝は神のことを思わず、反つて人のことを思う』

「イエス振反りて弟子たちを見」

キリストの視線が向くと、それは、審判であると同時に恵みであるような視線です。

「神の国と神の義を求めよ」

というが、正に神さまのことをペテロは直ぐひっくり返した。

「神のことを思わず反つて人のことを思う」

と。相対界を問題にして、相対的な生命のことを問題にしている。神、神の国、神の義、神の愛、みんなこれは永遠の世界、永遠界です。

人間は死に限定されたものです。これはキルケゴールじゃないけれども、いかなる人も死に限定されている。ところが、この死を突破した人がある。そして本当に、仏教の言葉でいうと、「往生」した人がある。それがキリストです。本当に、往きて生くる。私が死んだら、

「長逝した、死去した」

とか絶対と言っては困る。

「小池無者は往生した」

と言ってくれなくては。

そういう、極めて本質のことに関わってくると、キリストは容赦ない。相手が愛弟子のペテロであろうと、闇の力の下にパッとペテロは入ったから、

「サタンよ退け！」

と。そこが烈しい両刃の福音です。生きた真理に即しての変化ですから。

満月というものは、秋の十五夜なんていったって、なかなかよく見えない。一茶という俳人は非常に好きですが、

「名月のさつきさつといそぎたまふかな」

名月がさつきさつと雲の中に入ってしまったて、お月見をしようと思ったのが、直ぐ隠れてしまっじゃないかという。一茶というのは、そういうのをつかまえて、実にながったことを言う詩人ですね。

そこで、誘掖（導き助ける）どころじゃない。直ぐ、シモンに諭された。我々の心の世界に雲がかかってくるから、そうすると、途端にするどいことを言われる。

●己を棄て

34 斯て群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言いたもう『人もし我に従い来らん』



と思えば、己をすて、己が十字架を負いて我に従え。

これに誰も及第できません。論理的な人は

「己を棄てたら一体従うことができるか」

なんて、すぐそういうバカげた考え方をする。

「己を棄て、己が十字架を負いて」

の「己が十字架」とは何ですか。大体、

「己を棄て」

が本当にできるなら、キリストもお釈迦さんも要らないわけだ。我々は本当に己を棄てる
ことができない。これを

「罪びと」

と言う。我執の己だから、この「おのれ」というのは。自我という「エゴ」というもの。

「エゴ」に二つある。

「宇宙的なエゴ」

と、この

「相対的なエゴ」

と。我々のなんかはみんな相対的なエゴ、エゴイズムなんだ。このエゴが棄てられない。
それを「罪」という。エゴが罪の中心だから。

「この悪い言葉、この悪い行い」

なんてのは、そのただ枝葉に過ぎない。本当はみんな破れています。本当は破れているの
に破れないような顔している。どんな立派な人でも、私は、そういう意味では、ちっとも
尊敬しようとは思わない、そういう次元からは。キリストの前に降参するまではダメなん
です。その「降参」も、一時的にはするかも知れない。しかし、それは本当に降参できない。
本当に降参できないから、キリストが、やむをえず、

「お前の代わりに私が降参してやる。これは全部、十字架してしまった」

と。「神さまの義」、これはパウロがロマ書3章や6章で徹底的に言っている。

「お前のエゴは私が全部十字架してしまった」

と。だから、パウロの、

「我キリストと共に十字架せられたり、もはや我生くるに非ず」(ガラテヤ2:
20)

という、あの言葉を本当に受けとらなければ、福音の世界に入れない。

「そうですか」

と、そう言ってたで頭で納得していたのでは、信仰でも何でもなし。このパウロのガラテ
ヤ書2章20節を一晩かかって祈り込んで自分のものにしたら、翌朝、もう聖霊がグーッと
満ちてしまう。



「私はそこまで来るまでは、もう祈りを止めないぞ」

くらいなことではなければ…（異言）…。

みんな、十字架のことを大抵いい加減にしている。キリストは本当に生命を棄てられた。「我々のため」でなくて、

「我がため」

にです。そのことに本当に気がついて、ぶっ倒れて、そうして

「ああ、十字架！」

と。そこに宗教改革が始まったんです。その焦点、この一点でマルチン・ルターの宗教改革が始まった。その他の一切の問題じゃない。これが焦点です。このエゴがすつ飛ばされてしまった。

あいかわらず、ルターは、生来のルターの中にはエゴがあります。そんな事はもはや問題でなくなっていました。そういう絶対次元を賜るんです、絶対恩寵の次元を。そこには聖霊が来るんです。そうでなかったら、聖霊でない。

ただ熱っぽく祈って、それで「聖霊が来た」なんて、そうじゃない。十字架が本当の土台になってなかったならば。観念信仰にも、御利益信仰にも、いわゆる霊的信仰にも、私は反対する、パウロと一緒に。

「己を棄て」

といっても、棄てられないんです。誰も、このキリストの言葉に及第できない。「己を棄て」とキリストはおっしゃるけれども、キリストは、それができないことが分かっているから、

「その代わり、私が自分を棄てるよ。十字架に棄てるよ、お前の代わりに」

と、代わったんです、「贖罪」というのは。身代わりになった。神の義は審きましますから。審く義がまた恵みとなるんですけれども。義そのものは審こうとしていないんだけれども、審判をもたらしものが我々の、このエゴなんだから。

神の御意が神の義なんです。神の御意を本当に身をもって行じた人がキリストです。だから、キリストは神の義、義の実体なんです。

「神の義は福音の中に現れた」

というが、この神の義を身をもって証し、身をもって体现した、このキリスト自身が即ち福音体だから、

「神の義は福音によりて現れた」

と、パウロが言った。そのことに、初めルターは気がつかなかった。単なる審判だと思った。そうじゃなかった。義は本当は人を活かすもの、それを審判にしまったのが、この罪なんだ、エゴなんだ。

キリストの十字架で、エゴはすつ飛ばされたから、もうエゴはなくなっていました。そうしたら、パウロはその次に、何と言っているか



「キリストわが内に在りて生き給うなり」

と。キリストは天界にいらつしやる。「キリストわがうちに」というのは、

「み霊のキリストが、キリストのみ霊がわが内に」

ということ。これは聖霊のことです。だから、ガラテヤ書2章20節は同時に

「十字架と聖霊」

を語っている。

●霊の貧しき者

もう一つ、山上の大告白の第一言です。

「恵福なるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」(マタイ5:3)

キリストの伝道の第一言、「恵福なるかな、霊の貧しき者…」は、勿論キリスト自身の告白です。キリストは神さまの前に自分を何者ともしなかつた。これが

「霊の貧しい」

ということ。「天国」――即ち「神の支配するところ」――神さまはキリストを完全に支配された。御意が体现されていった。

私たちはキリストの真似は出来ません。それで、私は瞑想して読んでいるうちに

「恵福なるかな、汝、わが十字架によつて霊が貧しくされた者よ、自分を何者とも

しなくなった者よ。天国即ち聖霊の我、天国体、汝のうちにあり」

と響いてきた。そうしたら、キリストの言葉が読めるようになった。これが天国の鍵だ。福音の鍵だ。ガラテヤ書2章20節とマタイ伝5章3節が同じなんだ。そんなことは誰も言わん。キリストが示した。だから、何もなくなつて、私は非常に楽になった。

「ものため袂やひえひえ夏の月」

という。何も有たない。たもとの中に何も無い。夏の月を見ているようなものだ。軽々でしよ。だから、歩いているうちに、スーッと上に上がりそうになる。荷物を持っていないと、上に上がるから困る。私は空っぽになると、スーッと上に上がっていく。それくらい、身が軽くなつてしまった。こだわるものが無くなつてしまった。本当ですよ。

「キリストにある」

という事態はそういうことです。人間だから、相対的な波や風が吹いたり、ガタガタしても、その奥にいつもスーッとした世界があるんだ。あり難いね、これは。それでなければ、私は生きていると言えないから。キリストの気が、ちょうど、五月のこいのぼりみたいに風が吹き通ると、鯉がひらひらと泳ぐ。

それで、「己が棄てられてるんです。「己を棄て」とは、キリストが、

「私はお前のために己を棄てた。それをそのままお前にやるぞ」

と。これが「己を棄て」ということです。不可能な言葉が恩寵として可能になってくる。



キリストは、私たちにできないことばかり言う。何故そんなのが福音かというところ、キリストを受けると、それがもの凄い力の言葉に変わるから、「福音」なんです。本当に力の言葉に変わっていないければ、それは福音じゃない。それは「律法」になってしまう。新しい律法をたくさん作って何のかんのとやっているキリスト教が多いけれども。

●己が十字架を負いて

「己が十字架」とは何ですか。

「こういうことは私の十字架です」

なんて時々言うよ。「己が十字架」とは本当は

「神の十字架」

なんです。

「神が与える十字架」

「私（キリスト）が与える十字架」

です。今晚初めて、そのことを言います。

「己が十字架を」

じゃない、

「私（キリスト）の十字架を」

です。

「私の十字架を負いて私に従え」

と。「私の十字架」とは何ですか。キリストは、十字架を人の愛の為に負った。人のために本当にしていくことが、この「己が十字架」なんです。自分を完全に提供していく。非常に軽く自由になった者は、人のしもべとなって仕えていく。人の為に大いに何でもやっていく。やらざるを得ない。

マルチン・ルターの『クリスチャンの自由』は最後にそのことを語っている。

「自由は愛の自由である」

と。勝手にする自由じゃない。世のため人の為に、いやな事でも何でもみんなしよっていく。人を助けること、人を救うこと、それが「己が十字架」なんです。「私の十字架」というのは、キリストの負われた十字架は、みんな私たちの恩恵の内容を持っている。

「苦しんでいる人の為に、悲しんでいる人の為に、行き詰まっている人の為に」と。

「己を憎まなければ私の弟子となることができない」

とキリストが言われた。

「自分なんてものは、吐き棄てるような気持ちにならないければ、本当の私の弟子じゃないぞ」



と。これは手放しで我々には出来ません。

「自分は、何もありません、何も出来ません。ガラクタそのものです。それだから、こんなものは、自分でもって嫌気がさしてます」

と。そのような気合になって来ると、今度は神さまの愛が、キリストの愛が流れてしょうがない、やって来てしょうがない。だから、

「私の十字架を負え」

ということとは、最後は

「私がお前の中で十字架を負うぞ」

ということになる。

コルベ神父のアウシュビッツ収容所での有名な実話がある。所長が

「逃げた奴があるから、その罰にお前たちの何人かを殺す」

と。それで選ばれた中の一人が、

「私は妻子がいてどうしても死ぬわけにはいかない」

と哀訴した。蹴飛ばされた。そしたら、コルベさんが、

「どうぞ私がこの人の代わりになる、私を殺してくれ」

と。コルベ神父は正にキリストの十字架を負った。主の与え給うこの十字架を負って、そして、その人が助けられて、その事を証したわけです。それでなければ分らないんだ、コルベさんがその犠牲的な愛を買ってでたことが。その他、いろいろ殉教者の例があります。みな素晴らしい。

だから、私は、

「十字架を負うなんて言ったって、そんなことできるか」

と、自分で言っている。キリストが来て、そのみ霊の愛の力でもって、負わせてくださる。わが内で負ってください。その中に本当に自分を入れて、もの凄いことにならないことには、それはできない。

今の話は極限状況においての話ですけれども、極限状況でなくて普段の生活で、その角度のその質が非常に大事なことです。ひとは直ぐ損得を計算する。天国人はこの世でマイナスの何乗かをしよっていかなくてはいかん。そして、それが逆に全部プラスになる。

トランプでもそうだよ。スペードを全部集めてしまうと、今度はプラスになってしまう。面白いね、あのツーテンジャックというのは。

それで、やつとこの句が読めるんです。それでなければ、私には読めない。讃美歌で、

「主にのみ十字架を負わせまつり」

なんて、私はあの句は、本当の意味ではあまり好きじゃない。「主にのみ十字架を」なんて、なんか偉そうなことを言って、冗談じゃない。その「主にのみ十字架を負わせまつり」は、しかし、



「主がその主の十字架の一端を負わせてくださる」ということです。

●己が生命を救わんと思う者

³⁵己が生命を救わんと思う者は、これを失い、我が為また福音の為に己が生命をうしなう者は、之を救わん。

「己が生命を救わんと思う者は、これを失い」

正にそうです。己が生命を救わんと思う者は、エゴが働くから、ダメだ。

「我が為また福音の為に己が生命を失う者は、み霊の力でもって棄ててかるのは、それを本当に救わん。天国に入れられるぞ」

と。そういうギリギリの現実に自分を置かなければ承知しないし、それではなければ本当に力が来ないということを、自分で体験してください。でなければ、いつまでもいくら聞いてもダメなんです。

「八万四千の法を説いたが一つも説かなかった」

とお釈迦さんが言ったとおり。自分で体験するまでは真理は身につかない。真理が身につくまでは、それはまだ嘘もの、借りものだ。ウソとまでは言わなくなつて、借りものだ。借りものもダメだ。

もう、今晚一晩で、ガラリとそこところが本当に分らないと。死ぬか生きるかの集会なんだ。そして、この祈祷会でそのひっくり変えりをやったら、日常生活で同質的なものが展開して行きます。それは自分で分かる。神さまに鍛えられていく。

³⁶人、全世界をもつくとも、己が生命を損せば、何の益あらん。

地球が天秤の片方の皿にのつかつて、もう片方に一人がのつている。

「地球よりも、全世界よりも、こつち（一人）の方が重いんだぞ」

と。キリストは、

「この一個の価いは、我々一人一人は全世界よりも重い。ここに宿る生命を失つて

はダメだ。全世界をもらつたつて何になるか」

と仰る。個の絶対の意味を、価値を言われたのは、実はキリストなんだ。この、しょうがないエゴが実は非常に大事なエゴなんです。

我々一人一人の指紋だつて皆違う。同じのがないというんだから、

「神さまは最大の芸術家である」

というのは、そのことです。類型的なものとは造らない。一人一人はみんな天下、一品に出来ている。

「落ちこぼれ」

なんて、一つもない。あんな言葉は、私は大嫌いだ。冗談じゃない。どんな生徒であろうと、



絶対に落ちこぼれじゃない。神さまに顧みられている。一人一人は神の愛の存在なんです。
「我、神に愛されている。故に我あり」
という。デカルトの

「我思う故に我あり」

なんて冗談じゃない。あんな言葉は空しいと、シュバイツァーが言っている。だから、現代人は自意識過剰になる。「我思う故に我あり」なんていう「思う」主義が多い。思案ばかりして、ちっとも動かない。

全世界とも比較にならない意味を、一人一人がもっている。アトラスみたいに逆に地球を背負うように。日蓮が

「私は日本の柱だ」

と言った。あれが、正に

「我なり」

の世界です。神さまはエレミヤに、

「エルサレムに一人の義人がいるならばこのエルサレムの罪を赦す」

と言った。

学校に一人の本ものの先生がいれば、その学校は救われていく。支えているんだ、その人が。円現塾のU君にしろ、北海道のM君にしろ、信州のK君にしろ、みんな一校、一塾の、重鎮なんだ。この福音の真理の前には絶対に動かんという。

人を審くんじゃない、しょっているんです。キリストの負う十字架を負わされている。

●隠れた福音

そういう不滅の生命を、そのいかに驚くべき永遠の生命をキリストは持っていたか。そのことの予表がその次の9章に出ている「変貌の山」のところです。

2 六日の後、イエスただペテロ、ヤコブ、ヨハネのみを率きつれ、人を避けて高き山に登りたもう。斯て彼らの前にて其の状かわり、³ 其の衣かがやきて甚だ白くなりぬ、世の晒布者も為し得ぬほど白し。⁴ エリヤ、モーセとも
もに彼らに現れて、イエスと語りいたり。

エリヤとモーセが現れて来た。旧約の驚くべき二人の人物です。エリヤは450人のバアルの預言者相手に一人で戦った。神の火が降^{くだ}ってきた。天界へ火の車に乗って昇っていった。列王記略の所を読むと、素晴らしい。モーセは旧約聖書の土台を築いた人です。

モーセの「十誡」というのは、本当は「十言」というので、戒めではない。ヘブライ語でもそう書いてある。モーセの十言というのは、始めの四つは、神さまとの関係です。五番目は地上における縦の関係、父母との関係です。後の五つは、民法に出てくる、人間との関係です。



「殺すなかれ、姦淫するなかれ、盗むなかれ、偽るなかれ、貪るなかれ」
という。あれは本来は「なかれ」じゃないんだ。

「汝は殺人しない、姦淫はしない、盗まない。偽らない。貪らない」
という、隠れた福音なんです。断定的な否定なんです。

「私が神さまだから、お前はそんなことはしない」

という、信頼している言葉なんだ、本来は。律法ではないんだ。だから、私は

「隠された福音」

と言っている。それをユダヤ人は完全に律法にしてしまった。そこから「すべからず」という気持が派生して来るでしょうが、本来は「ロー」という言葉は「ではない」という断定的な否定ですから。日本語では少なくとも、

「殺人はせじ」

と、これ位のところです。「べからず」じゃない。神さまとイスラエルの関係は信頼関係だから。

とにかく、信頼関係、信愛関係がなくなったら、すべてはダメになる。縦の関係も、横の関係もダメになる。それが、賃金闘争だとか、闘争意識ばかりやっている。権利ばかり主張している。何が民主主義だ、と言いたくなる。神主義と言いたい。神さまを主にしなければダメなんだ。リンカーンは「民主」の前に

「アンダー・ゴット」（神さまの下において）

と言っている。日本の政治家は、魂がそういう角度のものを持っていなければダメだ。経済大国なんていったって、しょうがない。私は、日本が一番危ないと思っている。それは、外国が恐いからじゃない。日本人自身の在り方から自ら滅びを招く。

「学校の校長さんは先ず山にこもって瞑想し祈ってから教育しようじゃないですか」

と、私は二千人以上の全国高等学校長会議で三度叫んだ。それは空しく虚空に消えていった。文部省の役人がいたって、私は一向差支えない、はつきり言ってやった。福音を否んだら、キリストを否むことになるから。

我々は、こうやって、火の出るような福音の世界で、今、魂がその中にグングン入っている。語るも聞くも同じことです。その中に本当に入って、

「もう他のことは知りません。仕事も何もうっちゃって、やって来ました。そんな

ものはとても問題になりません。良かったです」

と。そのために、この集会をやっているんだから。人との約束なんて破って来ればいいんだ。仕事なんか休んでくればいい。福音の世界は計算の立たない世界です。そのためには、本当に生命賭けで来なければダメなんです。

命懸けの集会をしないのならば、いつでも私は解散してしまうから。あなた方の魂を愛



するから、私は烈しいことを言うんです…（異言）…。

●復活の予表

ペテロがまた余計なことを言つて、

5 ペテロ差出^{さしだ}でてイエスに言う『ラビ、我らの此^{ここ}処に居るは善し。われら三つの廬^{いおり}を造り、一つを汝のため、一つをモーセのため、一つをエリヤのためにせん』

「ここに庵^{いおり}を建てましょう、一つをあなたのために、一つをモーセのため、一つをエリヤのために」

と、まだ次元の低いことを言っている。それは、人間的親切か何か知らんけれども。

7 斯^{かく}て雲おこり、彼らを覆^{おお}う。雲より声出づ『これは我が愛^{いと}しむ子なり、汝ら之に聴け』

霊雲が起こり、彼らを覆う。はつきりこれは霊雲です。その霊雲から声がして、

「これは我が愛しむ子なり、汝ら之に聴け」

キリストがヨルダンで我々のために回帰の洗礼を受けて、同時に聖霊のバプテスマにあずかった時に、この声が響いてきた。あれは十字架の予表なんです。

今度は、復活の予表として、この変貌の事態が現れた。復活のキリストの身体はこの様に輝く。そして、この声が響いてきた。この事実が復活を事実をもって預言しているわけです。

8 弟子たち急ぎ見回すに、イエスと己らとの他には、はや誰も見えざりき。
9 山をくだる時、イエス彼らに、人の子の、死人の中より甦^{よみが}えるまでは、見しことを誰にも語るな。

モーセとエリヤはサツと天界にいつてしまつて、イエスだけ残った。イエスは、

「人の子の死人のうちより甦えるまでは、見しことを誰にも語るな」

というのは、正にそういうわけです。

「甦りだよ。お前たちは復活の私を、今、あらかじめ見たわけだよ」

と。それでも、信じない、うろたえる。生まれつきの人間なんてそんなもんです。だから、絶対次元のこのキリストの前について、本当に今晚、降参しないなら、もうキリスト教をやめてください。いいですから。他の何でもやってください。私はもう語るに飽きた。ちよつと、すてばち的な言い方で申し訳ありませんけれども。

キリストはその次に、

19 爰^{こゝ}に彼らに言い給う『ああ信なき代^よなるかな、我いつまで汝らと偕におらん、何時まで汝らを忍ばん。

「もう耐えられない。向こう側にいつてしまふよ」



と。けれども、キリストが向こう側に往くのは、ただ往くんじやない。

「わが受くべきバプテスマ」

十字架というバプテスマを受けて、

「思い迫ることいかばかりぞや。この火燃えたらんには何をか要せん」（ルカ

12・50）

と仰つていらつしやる。そして、今度は聖霊が臨んで来る。ペンテコステの時に各人に火が灯った。スペインの画家が書いている。

●幼児の一人を受くる者

次のところは癲癇^{てんかん}を治す時の話です。

23 イエス言いたもう『為し得ばと言うか、信ずる者には、^{すべ}凡ての事なし得らるるなり』

「私を受けとれば、私の力で何でもできるぞ。お前の相対的にできることが、もの凄^{すごい}いことになってくるぞ」

と。「何でも」とはそういうことです。人によつて限られているから。

「その人に与えられた事なら、何でもできるぞ」

と。その気合の中に入つて、本を読んだり、勉強したり、仕事をしたり、何でもやつてくださいよ。凄^{すごい}いことになるから。だから、私は

「一切の文化文明の根底はこの福音の力だ」

と言っている。福音は根の世界だ。根っこが枯れたら、みんな倒れてしまう。根っこに天来の水を注がないと、枯れてしまうんだ。聖霊の水を注がないと。

35 イエス坐して、十二弟子を呼び、之^{すべ}に言いたもう『人もし頭^{かしら}たらんと思わば、^{しりえ}凡ての人の後となり、凡ての人の役者となるべし』

十二弟子を呼ばれました。

「人の上に立つとうとする者は人の後方^{しりえ}となり、しんがりとなれ。役者^{えきしや}となれ」

と仰った。要するに、

「どん底に立て」

ということですよ。

天国への旅を皆さんとやっていく。私はしんがり、天国の門が閉じる寸前に、私が最後に入つて往く。そのつもりで、一緒に歩いていきます。楽しい旅路ですよ。人生は福音の旅路。日曜から日曜は、オアシスからオアシスまで砂漠を歩くようなものだ。日曜というのは復活の日だから。日曜は、他の事を止めて、福音の世界に入つて、キリストの水を飲む日、力を得る日なんだ。ラクダのように砂漠を通る時に先ず水を飲まなければしょうがない。日曜というのは原動力だから。律法^{おきて}で護っているんじゃない。日曜はそういう



福音の世界に入らざるを得ない。二、三人であろうと、何人であろうと、一向差支えない。ところが、日本の社会は悪い。その属している団体が日曜にいろんな事をするものだから、止むを得ず日曜の集会を休む。悪いとは言わないけれども、時にはそんなものは蹴飛ばして来なければ。キリストのために

「病気になるました」

と言つて、出て来ればいいんだ。それは冗談だけれども、そのくらいの気持を持ってやつてください。1940年から、私は今日まで、貫いて来たから。

36 斯てイエス幼児おさなごをとりて、彼らの中におき、之を抱かかきて言い給う、37 『おおよそ我が名のために斯る幼児おさなごの一人を受くる者は、我を受くるなり。我を受くる者は、我を受くるにあらず、我を遣つかしし者を受くるなり』

幼児おさなごの存在は、キリストにとつては天国の双葉みたいなものです。幼児というのは全的だから。全的存在です。笑うにも走るにも泣くにも、分裂がない。

「父の全きが如く全かれ」

というのが、これなんです。この全的なんです。思案しないんだ、幼児は。天使が護っている。だから、本当に偉大な魂は、死ぬまで童心を失わない。童心を失ったらダメなんです。キリストも童心を失わない方だった。童心を失ったらどうしようもない。私みたいにバカにならなくては。

● 富める青年

10章17節、「富める青年」のところですよ。これは、北の方から南の方のエルサレムに向かつての、キリストの最後の旅だ。

17 イエス途みちに出で給いしに、一人はしり来り跪ひざまずきて問う『善き師よ、永遠とこしえの生命いのちを嗣つぐためには、我なにを為なすべきか』18 イエス言い給う『なにゆえ我を善しと言うか、神ひとりの他に善き者なし。』

この言葉が、私は大好きな言葉です。

「私のことをなぜ善いと言うか。神さまの他に善いものがあるか」

と。こういう言葉を決定的に受けとつていかななくては。

「まだそれでも善いものがあるじゃないですか」

なんて、そんな相対的な価値を言っているんじゃない。太陽の光にどんな地上の光が相手になれますか。これは、いわゆる道徳的判断をもうひとつ超えた、次元の高い世界です。

「私はちつとも善くはないよ。神さまの善きものをいただいているだけののはなしだよ」

ということですよ。

19 誠命いましめは汝が知るところなり「殺なす勿なれ」「姦淫するなかれ」「盗むなかれ」「偽



証を立つるなかれ」^{あざむ}欺き取るなかれ「汝の父と母とを敬え」²⁰彼いう『師よ、われ幼き時より皆これを守れり』

「先生、幼い時からみんなこれを守ってきました」と。

²¹イエス彼に目をとめ、愛^{いづく}しみて言い給う

「よくやったね、感心だねえ」と。ところが、どっこい、

『なんじなお一つを欠く、往きて汝の有^もてる物を、ことごとく売^かりて、貧しき者に施せ、さらば財宝^{たから}を天に得ん。且^{かつ}きたりて我に従え』

さあ、次元が変わってきた。相手は金持の青年だから、

「一番大事なものを棄てろ」

というんだ。

「そうしたら、宝を天に得る」

と。いろんな金持の話があるが、ただ貯めることばかりに興味のある者がある。さっぱり使わない。どうするんですか。次の世界に往く時には、それをみんな持つていくのか。一銭も持つていけない。皆、次の世界は裸で行く。

私なんか聖書を持つていきたいけれども、聖書も持つて行けない。聖書を全部食らつて往かなくては。ただ一つ持つていくものがある。それは聖霊です。聖霊だけは離してはいかん。聖霊だけが無限無量の財産だから。聖霊は何ものとも代えることができない。

この青年は金持だから、金をやっちゃまえと。学者だったら、その学問を棄てろと。とにかく、その人が大事だと思つてい^るものを棄てろということは、最後は

「その人自身を棄てろ」

ということになる。

「お前自身を棄ててかかれ。そしたら、宝を天に積めるぞ」

と。「捨て身」という日本語があるけれども、「捨て身」とは本来は素晴らしい言葉だ。浄土真宗に捨て身の坊さんがいたね、素晴らしいのが。

パウロが言っているように、

「在れども無きが如し、無けれども在るが如し」

という自在な魂になる。こだわるなど。神さまのためには、大いに金を儲けたつていいよ。それは本当に福音のため神のために使えばいいんだから。

「我にしたがえ」

と。「従う」ということは非常に嬉しいことなんです。「服従」という言葉が何か卑屈なように響くけれども――信^し従^う、信じ従う――キリストについて行かなければいけないんです。

「そんなこと仰らなくても、ついて行かざるを得ません」

と。これは全身的行為です。即^{すなは}ち行^なの信。即^{すなは}ち行^な、全身的行為です。信仰そのものが全身的な打ち込み、投げ入れなんだから。心理的に信するなんていうものではない。



もう、こういうことになったら、力が来てしょうがないですよ、皆さん。

「力が来てしょうがない。どうして、こんなに力が来るんだろうか」

と、疲れを知らなくなる。眠くはなるけれども（笑）。どこを読んでも、読んでいるうちに楽しくなってしまう。だから、福音なんです。

「キリストの中から読む」

のだから。「外から」読むんじゃないんだ。キリストの中から、キリストの光で読むんだ。

この「富める青年」も――手放しだったら、みんな「富める青年」と同じように我々は落第するけれども――キリストの中に入って、もう自分が棄てられている所に入ってしまうと、

「はい、大丈夫でございます」

ということになる。

●神有

ペテロは相変わらず、言っている。

28 ペテロ、イエスに^{むか}対して『我らは一切をすてて汝に従いたり』と言い出で

たれば、29 イエス言い給う、『まことに汝らに告ぐ、我がため、福音のために、

或^{ある}は家、或は兄弟、あるいは姉妹、或は父、或は母、或は子、或は田畑を

すつる者は、30 誰にても今、今の世の時に百倍を受けぬはなし。

全部、これは凄いことになっていく。それはみな神の^{もの}有ですよ、どんなに受けとつても。私有というものはない。これは全部神有なんだ。神有だから、これが本当の意味で使われていく。どうせ、向こう側に往く時には何も無いんだから。私有も公有も共有も、全部、本当は神有です。神の有。こんなことを言ったって、今の世の中は通じない。それくらい20世紀は、真理の世界でギリギリのところに来てしまっている。

日本の民主主義なんて、本当に、嫌やになってしまふ。大きな間違った民主主義がはびこっている。みんな自己中心の身勝手主義で、とんでもない。東京の「シルバーシート」なんかを見たって、そうだな。あんなものを作ることが本当はおかしい。老人や、子供を抱いている人があつたら、

「どうぞおかけください」

というのが当たり前のはなしなんだが、若いのができない。女性すら、老人に対してそれができない。逆に眠ったような顔してる。ああいう姿を見ると、日本の滅びの姿の象徴のような気がする。社会道德とか何とか、そんなことを説く必要はない。

「福音に來い」

ということですよ。だから、皆さんは本当に、一人二人三人と、神の民を本当に造ってくださいよ。でなければ、キリストに



「ちよつと待て。お前は、天国に入れるわけにはいかんぞ」と、やられてしまう。

「人を助けざるを得ず、救わざるを得ず、福音の中に入れざるを得ず」と、事実をもつて行動していかなくては。

「働くことは即ち祈りなり」（ラボラーレ エスト オラーレ）
という言葉がある。そういう意味におけるところの行動的なものは、これは祈りだ。

●躍り上がりて

46 斯て彼らエリコに到る。イエスその弟子たち及び大なる群衆と共に、エリコを出でたもう時、テマイの子バルテマイという盲目の乞食、路の傍に坐しおりしが、47 ナザレのイエスなりと聞き、叫び出して言う『ダビデの子イエスよ、我を憫みたまえ』48 多くの人かれを禁めて黙さしめんとしたれど、増々叫びて『ダビデの子よ、我を憫みたまえ』と言う。

目が見えないというのが、人間の地上での、相対的な意味において一番不幸な現象でしようね。私は、自分の母が失明したから、よくその気持は分かる。私は母のことを思うと窒息しそうになった。それでも、母は一言もそのことをこぼさなかった。ある時、一遍私にいいました。

「自殺したいと思ったけれども、お前たちを思つてそれは留まつた」

と。50歳から88歳まで38年間失明していた。だから、

「我を憫みたまえ」

という気持がよく分かる。

48 多くの人かれを禁めて黙さしめんとしたれど、増々叫びて『ダビデの子よ、我を憫みたまえ』と言う。

「ダビデの子」というのは「メシヤ」ということです。

49 イエス立ち止まりて『かれを呼べ』と言い給えば、人々盲人を呼びて言う『心安かれ、起て、なんじを呼びたもう』50 盲人うわぎを脱ぎ捨て、躍り上りて、イエスの許に來りしに、

誰かに連れていつてもらつたんでしようけれども、

「上衣を脱ぎ捨てて躍りあがりて」

という。この、盲人のキリストに対する信頼の姿です。私が画家だったら、これを書きたい。日本の絵描きは、そういうのに感激して書くような人はいないのかね。へんてこな漫画ばかり書いているけれども。日本は漫画王国だ。マンガ王国、野球王国、週刊誌王国、テレビ・コマーシャル王国。それだから、教育の面がガタガタになってしまふ。全部、掻き乱されている。日本人というのは、それがもう当たり前のような顔している。



「一体どういうことですか、日本人の精神はどうなるんですか」と、いつか私はドイツ人に聞かれたよ。

⁵¹イエス答えて言い給う『わが汝に何を為さんことを望むか』盲人いう『わが師よ、見えんことなり』

「ラボニ、見えないんです」
と、実に切実な要求です。

⁵²イエス彼に『ゆけ、汝の信仰なんじを救えり』と言い給えば、直ちに見ることを得、イエスに従いて途を往けり。

凄いね、キリストという人は。

「往け」

と言った時に、もう目が開いてしまうんだから。

「汝の信仰なんじを救えり」

「お前はそんなに私を求めたか、大丈夫だよ」

と。だから、キリストを本当に求めて、しがみついて、キリストの中に入れば、驚くべき事が起きるんです。我々一人一人がその行き方をしなかったならば、信仰じゃない。何も盲人の話じゃない。この盲人の、キリストに向かつての、この気合です。本当は、我々自身が目が開いているような顔しているけれども。

「福音の世界で、本当に目が開いているか。キリストに向かつて、しやにむに行け」ということです。

「御ふところに寝ます、永遠の御腕を枕とします」

と言つて眠る。翌朝は、力を得て起き上がる。何をしていても、

「主さまー！」

と言つて、キリストの中に入る。車を運転していても、そうだ。

「南無阿弥陀仏」

「南無妙法蓮華経」

も素晴らしいけれども、もつと簡単なのは、この

「主さまー！」

の一字です。キリストは直々に

「父よー！」

だ。我々は「父よ」よりも、「主さま」だ。この救い主に向かつて、「主さま」と言う。

もう言うことないでしょ。後は、この主さまに全身をもつて投げ入れる祈りをしてください。祈りに入ります。体裁じゃないですよ。思案じゃないですよ。自分の信仰じゃないですよ。私が先に祈りますから、もう勝手に、私が祈っているうちでいいですから、勝手に祈ってください。

